

A 気配り

スーパー店内で私は棚の低い位置を物色していた。突然、一キログラムの粉ミルク缶が私の脳天を直撃する。一人の女性客が高い棚に背伸びしていた。下にいる私を邪魔物のような態度で見下ろしている。缶の角が当たっていたら私の頭皮は裂けていた。そうならなくて、まだしも幸運だったらしい。

『痛い……いたあい……』 激痛に私は思わず叫んだ。この国の庶民は『ごめんなさい』を滅多に言わない。このときも言わなかった。ガラガラの店内なのだから、なにも私の頭上で粉ミルク缶を引っ張り出さなくてもよい。三十秒も待てば私は移動していた。激怒の処理方法がない。私は加害者を見ないで再び『いたあい……』と大声を上げた。店員も他の客も加害者すらも珍獣を眺める目付きで私を見ている。

次の事例では店員が加害者だ。スーパーのレジに並んでいた私の足首（アキレス腱）を

八五  
八六

激痛が襲う。鉄製の手押し車を店員が力まかせに押しているのだ。

何に悶えて動かないのか見ようもしない。

『なにするんだ』。私の大声が店内に響いた。

やっと、店員が手押し車を戻す。そして、不快そうな顔で私を見る。謝罪はない。

（アキレス腱を切られなくて幸運？ だった）

そう思うしかないのか。私が入院しても誰からの補償もないだろう。

やはり、スーパー店内での出来事である。

商品を満載したアメリカ人の手押し車が私の体に軽く触れた。

「ごめんなさい（アームソリー）」

声の主が私に頭を下げる。私は笑顔で応じた。

この違いは何なのか。知人に尋ねてみた。

「四百年間、スペイン人による苛酷な支配を受け続けたフィリピンです。『ごめんなさい』と言ったら命が奪われた事件も多かったのでしょうか。その時代に生成された深層記憶が残されているとも考えられますね」

実に感銘を覚える示唆を頂いた。

## 賤と無縁の子供たち

次は大衆食堂で頻繁に経験する事象である。  
子供たちが走り回っていて賑やかだ。私が食事を摂っている横の椅子に子供が土足で上がる。私の皿に手を突っ込む。それでも母親は笑って見ている。これでは常識のある人間が育つはずない。

私は皿を抱えて離れたテーブルに移動する。

## 爆竹公害

毎年、大晦日の爆竹に苦しめられる。一年間の鬱憤を吹き飛ばしたい気持ちは分かるけれども至近距離で爆発させられると被害甚大だ。

知人は車の中に投げ込まれ聴力障害になってしまった。

八七

八八

## 迷惑な身嗜み

次も頻繁に被害を受ける事例だ。

バスの座席で頭髪を梳るので、後部座席に座っている私の顔に頭垢が降り注ぐ。財布は持たなくても櫛だけは忘れずに外出する。身嗜みとは他人との関係で成り立つものだ。

櫛を撫んで動かせなくした知人がいる。相手の手に触れたら痴漢と間違われるので、この方法は推薦できない（痛快な話ではあるが……）。

## B フィリピン時間

昔、日本にも『なんとか時間』というのがあって、今日のような時刻厳守とは違っていた。この『なんとか』の部分は固有名詞、それも地名が多い。フィリピンの人たちは昔の日本人と同じで時刻に厳格でないようだ。フィリピンの場合『なんとか時間』の『なんとか』は地名と言うよりも国名になっている。

ジブニーやバスなどの公共交通機関には時刻表がない。地球上、暑い地域の人々は歩く速度が緩やかである。体力の消耗を避ける生活の知恵なのだ。フィリピン時間の誕生は気候にも原因の一つがあるのではないか。もちろん、環境や制度にも遠因らしきものはある。排水機能が悪くて少しの雨でも道路は冠水してしまう。交通事故の場合、車両を動かさずに（現場保存主義で）警察による現場検証が続く。何時間も後続車両は動けない。約束の時刻に行く努力をしても何かしら予期し得ない事態に遭遇する。

『時間を守らない』と目くじらを立てる前に『俺はフィリピンで環境整備のお手伝いを何かしているのかな』と自問すべきかも知れない。

会社勤務の人たちは毎日のように遅刻する。言い訳は例外なく『トラフィック（交通渋滞）でした』だ。この言葉は魔除けと同じらしい。

フィリピン人は待たせられても日本人のように腹を立てないのだ。しかし、世界の人々を相手にする経済戦争では遅刻常習犯に勝ち目がないと言わざるを得ない。

だが、経済発展が民族の幸福に直結するかは疑わしい二十一世紀だ。『フィリピン時間の功罪は論評を差し控えたい』

八九  
九〇

## Ｃ 責任感

何年前か、ミンダナオ島北部山岳地帯に航空機が墜落している。この航空機には農業技術指導者の若い日本人男性が搭乗していた。フィリピンの農民たちに敬愛されていた人らしい。

いつの事故も痛ましいのだが、この墜落事故報道に私は激怒した。NHKが『生存者十五名』と発表している。『現地対策本部によれば』とか『当局の発表によれば』とか、前提はあるにせよ、この虚偽報道は遺族にとって犯罪的だ。『生存者十五名』などという重大報道は慎重に扱わなければならない。『生存者あり』の発表直後に『全員死亡』では、あまりにも惨いではないか。

どうして、このような無責任発表をするのか、なんとしても理解できない。でたらめ発表をした責任者の処分は、どうなっているのか。

次は『責任感』の項目で扱つのは不適當かも知れない。『無責任』とは違って『無神経』

とか『非常識』とか、そういう標題を設けた方が適切かとも思える。

マンションには私の駐車スペースもあるが、私は車を持っていないので、空けておくしかない。家賃には駐車スペース代も含まれている。その私の駐車スペースに、いつも同じ車が置いてあるのだ。文句を言うと、その車は見当たらなくなるけれども別の車が不法占拠を開始する。使わないスペースなので、一言、挨拶があれば構わない。しかし、誰も断らないのだ。拙宅を訪問する知人は駐車場所がなくて、うろろろする羽目になる。何年間も我慢している私の怒りは爆発寸前だ。

## D 職人たち

借家なので修理に金を掛けたくないのだが、破れた網戸では蚊や蠅で不快な毎日になる。家主に苦情を言ってみたところで網戸が直る可能性はない。職人を呼んで網戸を修理する。職人が帰った後で気付いた。部屋の白壁に真っ黒な手形が残っている。拭っても落ちなくて、かえって汚れが広がってしまった。どの部屋にも被害が出ている。仕方がないので塗装職人を頼んだ。

塗装職人が帰った後で驚く。玄関の煉瓦壁に白ペンキが派手に塗り付けられているのだ。

九一

九二

塗装職人が試し塗りした痕跡である。ベンジン、シンナー、ガソリンで拭いたけれども、なんとなく汚れが残った。

書斎にも被害が出ている。新しい黒褐色の机に白い飛沫が広がっているのだ。薬剤で机のペンキを落とそうとしたが、机の塗装生地まで剥落し無残な顔になる。なんとも不快な模様だ。机に布を被せたけれど、紙が破れて書き難い。厚手のビニールを敷いた。せっかの机が安物に見える。

網戸職人、塗装職人、この人たちに現場を示して文句を言っても無駄だ。

「あなたは私の仕事に納得したから金を払ったのでしょ。いまごろ何を言うのですか」  
かえって職人に怒鳴られるのが落ちである。

(もう職人は頼みたくない)

## 大工の仕事ぶり

破れた天井を見上げながら暮らすのは気分が悪いので、またまた致し方なく隣家が紹介してくれた初老の大工を依頼した。

その大工が手ぶらで来る。

「鋸はあるか。金槌は……」

拙宅の道具箱点検が大工の仕事はじめだ。大工の指示で街のハードウェアショップ（金物・材木店）へ行き、角材・ベニヤ板・トタン板・金網・釘、これらを買う。以前の私なら、現金を預けて大工に買わせていたのだが、いまは職人不信だ。仕事ぶりだけでなく職人という職業に就く人間が信用できない。

四センチ角の材木切断が始まった。約三十センチの長さは何十本か揃えるのだが、私は『変だな』と気付く。最初に切り落とされた一本が長さの基準として使われてないのだ。何本目であろうと手近にある角材を基準にしている。

「その方法では次第に寸法の誤差が生じるのではないか」

大工は『素人が口出しするな』と言わんばかりの表情だ。切断作業終了後に並べてみると、かなり長さが狂っている。

「こんなに長さが違うではないか」

大工の目の前に突き付けても平然としたものだ。

九三

「同じ長さだ」

大工は天井の仕上がりに満足しているが、私は苦虫を噛み潰す。一日分の労賃は、五百円。安すぎるのだ。

（なるほど、賃金に見合う仕事か……）

翌日、ペンチ・ドライバー・鑿り・釘・鋸・金槌、これらを入れた道具箱が見当たらない。隣家の紹介した大工なので聞いてみたところ『住所は分からない、もちろん電話もない』との返事を頂いた。

紹介の責任など問題にしても無駄な話だ。

## クーラー取り付け

クーラー取り付け職人のときは目を離さないようにした。

窓枠のペンキが熔接作業にとっては邪魔だ。

日本から持参し愛用している紙切り鋏が机上にあった。その鋏に職人が手を伸ばす。ガ

九四

リガリと鉄で鉄棒のペンキを落としたり。

一瞬の悪夢によって、紙切り鉄としての生命を絶たれた犠牲者が机上に横たわっている。その姿は何とも痛ましかった。

## 危険なガス出口

お勝手のガス台を買わなければならない。専門店に寄った。四十年配の店主らしい男が応対する。

この男がゴム管の取り付けに手間どっているので近寄って見た。驚いた。異常に長い十本の爪が紅色に光っている。しつかりゴム管が持てないのだ。くわえ煙草の煙も目に染みる。店の前を若い女性を通る度に声を掛けたり忙しい。

やがて、この男が私にガス台を寄越す。

「ゴム管は確実に取り付けられてますか」

「大丈夫ですよ」

帰宅して使い始めたとき臭気に気付く。きちんとゴム管が取り付けいていないのだ。早く発見したので大事に至らなかったものの無責任の最たるものである。拙宅の全員がガス爆

九五

九六

発で死ぬ危険に曝された。この男の胸で揺れていた十字架を私は思い出して複雑な気持ちになる。

## 家具の搬入

家具店で洋服箆筒を購入した。

三人の屈強な男が拙宅に運び込む。玄関の扉と箆筒とが激突し双方が傷ついた。部屋のドアでも同じ事件が発生する。

洋服箆筒の傷を指さして私が文句を言っても、男たちは箆筒の扉を開閉して「ちゃんと開閉しますよ。何も問題ないじゃないですか」と受け付けない。

洋服箆筒の天井に電球が取り付け付けてある。コードをコンセントに差し込むと小さな爆発音を残して電球は切れてしまった。男たちは「やはり切れたか」と笑っている。

翌日、家具店で抗議する私は相手にされない。

「文句は運搬人に言つて下さい」  
なんとしても腹の虫が治まらない私は家具店で書いてくれた住所の紙片を頼りに尋ね歩く。

スクワッター（不法居住者）密集地域に入った。悪臭を放つ汚水の上に渡された一枚の板に用心ぶかく体重を乗せる。

通路の奥で木片に腰掛けて煙草を吹かしている男が紙片を手に指さして教えてくれた。  
「あそこだ」

針金で留められた戸を開けると、不揃いなベニヤ板と黒ずんだトタン板とで仕切られた空間が目飛び込む。一部屋（一区画）しかなくて、五人ほどの子供たちが地面に尻を着けて皿に盛られた飯を手づかみで食べていた。

心の中に用意していた抗議の声を私は飲み込んでしまう。

「昨日は有り難う」

それだけ言つと私は身を翻して待たせていたタクシーに戻った。

食器も家屋も傷だらけの環境に生まれ育てば無傷の家具など存在理由が理解できまい。

家具搬入時には洋服箆笥と玄関の扉との間に私の体を入れて激突を阻止するしか解決策が

九七

ないと覚悟すべきだ。これも暮らしの知恵である。

九八

### 冷蔵庫の修理

冷蔵庫修理で二人の職人が来た。

天板の確認で職人が椅子に上がる。いつもの通りで靴を脱がなかった。脱ぐフィリピン人（庶民）は皆無と言いたくなる。おそるべき悪習だ。磨き上げられた修理完了冷蔵庫は合格だったが、職人たちの帰つた後、うんざりしてしまふ。木製の床が傷だらけなのだ。新聞紙も敷かない床の上で金具を叩いた傷跡である。

これらの無神経さ不親切さには吐き気を催す。

### E 縁の欠けた皿

レストランが縁の欠けた皿に料理を盛り付けてお客様へ出す。場末とは違う都心の一流

レストランでの話である。別に珍しい情景ではなくて、ときどき遭遇する不快な接客態度だ。

最初のころ私は蝶ネクタイのウエイターに苦情を申し上げたが、もはや諦めている。

『食べる上で何か問題でもあるのですか』と言わんばかりの顔つきに絶望させられるだけだ。

縁の欠けた皿は拙宅でも出現するけれども、いまの私にはメイドを叱る気力もない。その皿は黙って屑籠へ捨てる。それでもメイドが、その皿を拾って再び使うので、真つ二つに割ってから捨てなければ駄目だ。

メイドは家族と別れて遠い南の島から出稼ぎに来ている。庶民の立場から見れば瑕疵に過ぎない縁の欠けた皿なので使って頂ければ、それに越した幸運はないものの、貰ったところでメイドにとって家族へ届ける方法がない。

まさか、いくらなんでも近所の庶民へ差し上げる訳にも行かないだろう。それこそ、フイリピン人のプライドに傷を付ける結果を招来する危険がある。

かくして拙宅の縁欠け皿は致し方なく屑籠へ行く運命を甘受するしかないのだ。

拙宅の高級陶磁器は施錠した書斎のロッカーで眠っている。

九九

一〇〇

## F 道具は文化

缶詰を買って帰宅すると拙宅は一騒動だ。メイドが包丁を持って缶詰に肉薄する。包丁一本で器用にあけるのだが、私には危なっかしくて見ていられないのだ。

拙宅のメイドが特別なのではない。どこの家でも普通に見られる光景だ。

日本から持参した大切な出刃包丁が缶詰開けに使われたら悲劇と言うほかない。

同じような運命が刺身包丁も襲う。骨つき肉片を目がけて刺身包丁が力まかせに降り下ろされるのだ。

日本人は何十種類もの包丁を用途に応じて使い分けている。そんな面倒くさい手続きなど常夏の国には似合わないのか。

『道具は文化なり』何かの本で読んだ気がする。



メイドの右手に持たれて芝生の雑草除去に活躍するのは裁ち鋏だ。裁縫の得意な日本人女性が落胆する。

何であれ『大事なものには施錠が必要』と肝に銘ずべきだ。それが海外生活の常識である。

### 怪奇かな文房具

マニラの文房具店で日本地図を見掛けた。懐かしくて衝動買いになる。しかし、帰宅して眺めると何か変なのだ。四国がない……！ 思わず絶句。

別の店で買ったコピー紙が、なんとなく妙なのだ。何枚か向きを変えて重ねてみた。紙が揃わない。直角に裁断されてない……？

確かめるために大きな直角三角定規を買った。しかし、それでも納得できなくて、もう一つ別の店で定規を買う。二つの定規が合わない。これまた、思わず絶句。物差しの寸法も違うのではないか。もう、私には調べる気力が湧かない。

文化は経済に密着している。奇怪な文房具が横行しては経済発展など望むべくもない。その自覚が国民になれば絶望しか残らないのではなからうか。